

ラ
ッ
パ
ー
の
り
お

吉
田

浩
二

登場人物

立野則夫（25）居酒屋でアルバイトしな

がらラッパーを目指している。

安藤隆史（25）立野の相棒

桜井花子（19）カラオケ屋店員

武田義春（28）居酒屋社員

葛野敏夫（45）デリヘル店員

立野太郎（50）立野の父。アルコール

中毒者

川中龍（28）ラップグループ、ノライ

ヌのリーダー

渋谷茂（22）ノライヌのメンバー

鈴木（25）立野と安藤の高校の同級生

二宮一平（33）音楽プロデューサー

○地下闘技場・スネイク入口（夜中）

深夜の裏通り。

ガラの悪い男たちがたむろっている。

○同・ホール前の廊下

廊下の隅で立野則夫（25）と安藤隆

史（25）が緊張した様子で小声でラ

ップの練習をしている。

立野が腕時計を見る。

立野「そろそろ行こうか」

安藤「やったるぜ」

2人はホールのドアを開けて入って行く。
く。

○同・ホール内

薄暗い中、大勢の若者達が立ってステ

ージを見ている。奥のステージでリズ

ムに合わせラップする若者。

ステージ端に立野と安藤が立っている。

MC「準備はいいかな？」

立野がうなづく。

安藤「手が震えてるじゃん」

立野「えっ、そ……」

立野は自分の手を見る。震えている。

MC「次はラップバトル初参加、地元出身

の川本小僧。音楽スタート」

音楽がスタートする。

立野と安藤はリズムに合わせてラップ
を始めるがよく聞こえない。

しらけて立ち尽くす聴衆。

観客1「おいおい、聞こえねえぞ」

観客2「ひっこめ、チキン」

観客3「びびってんのか」

観客たち「帰れ、帰れ、帰れ、帰れ……」

観客のブーイングが始まる。

ペコペコと頭を下げてステージ脇に引
込む立野と安藤。

○居酒屋「川本次郎」外観（明け方）

24時間営業と書いてある看板が光つ

ている。

○同・店内

狭い店内。カウンターとテーブル席が
2つ。

カウンター内で立野が焼き鳥を焼い
ている。カウンターには作業着姿の中
年客が2人と、二宮一平（33）が座
り、酒を飲んでいる。

武田義春（28）が入って来る。二宮
に気付いて武田がお辞儀する。

武田「二宮さん、おはようございます」

二宮「おはよう」

武田「毎朝、ありがとうございます」

二宮「家がすぐそこなんでね。仕事帰りに一

杯」

武田「ごゆっくりどうぞ」

武田はカウンター内に入って来る。

武田「おはようさん」

立野「おはようございます」

武田「ラップバトルどうだった？」

立野「聞かないでくださいよ」

武田「うまくいかなかった？最初はそんなも
んさ」

立野「というか、途中退場で・・・」

武田「途中退場？さんざんだな。まっ、気に
すんな。次がある」

立野「気にしますよ」

武田「場慣れってあるからさ。まずは空気に
慣れることだ。またエントリーする？」

立野「まだそんな実力じゃあ・・・」

武田「何度もその場に立って、まずは慣れる
ことだって」

立野「俺らの実力で参加していいものなの
かなって思うんですけど」

武田「そんなこと言ってるど、いつのまにか
何年も経って気づいたらおっさんだよ」

立野「・・・」

武田「月1回は出た方がいい。自信もちな」

立野「わかりました。じゃあお願いします」

俺、あがりなのでこれで」

武田「ゆっくり休んで」

○一戸建て外観（朝）

○同・玄関

立野が入って来る。

立野「ただいま。鍵かかってないよ」

○同・居間

立野太郎（50）がテーブルに突っ伏して寝ている。よだれをたらしている。チューハイの空き缶が何本もテーブルに置いてある。椅子には杖がたてかけである。

立野は床に転がっているダウンを拾い、太郎にかけてやる。

立野「飲みすぎなんだよ」

太郎はげっぷで答える。

立野「くっさ」

○仏壇前

立野が手を合わせている。中年女性の
写真が飾られている。

立野「母さん。今日はラップバトルデビュー
だったよ。結果はさんざんだったけどま
た挑戦する。見守っていて」
写真のアップ。微笑んでいる中年女性
の顔。

○同・立野の部屋

壁にはラップスターのポスターが何枚
も貼ってある。その中に「竜神 DJ
わたべ」と書かれた男の横顔のポスタ
ーもある。机の上には新聞の切り抜き。
ノートが何冊も積んである。

立野は服を着たままベットに倒れこむ。

○雑居ビル外観（夜）

○デリヘル「フラワーズ」事務所内

安藤が椅子に座っている。

葛野敏夫（45）が隣で雑誌を読んでいる。

後ろのソファーに女の子が座って、爪の手入れをしている。

電話が鳴る。

安藤「ありがとうございます。川本の楽園、
デリヘルフラワーズです」

客の声「初めてなんだけど」

安藤「どういう子がタイプで？」

客の声「ギャル系」

安藤「今は自宅ですか？ホテル？」

客の声「自宅」

安藤「住所は？」

客の声「んーっとね」

安藤が電話を置く。

安藤「ゆずちゃん、初仕事。ここ行って」

安藤は女の子に住所が書かれたメモを渡す。

安藤「場所はすぐ近くだしわかるよね」

女の子はうなづく。メモを受け取りし
ぶしぶ出ていく。

葛野が顔を上げる。

葛野「なんか儲かる仕事ないかなあ」

安藤「・・・・・・・・」

葛野「見つけたらさ、2人でやろうよ」

安藤「そうですね。給料日まだかな」

葛野「あと1週間もあるだろ」

安藤「長いつすねえ。どうしよ」

安藤は財布を開けてみる。1000円札
が2枚。

○プロミス外観（夜）

○同・中

安藤がATMにクレジットカードを差
し込み、金を引き出している。

○公園のベンチ

ヘッドフォンをつけた立野がアンパンを食べながら紙に何か書いている。アンパンをベンチに落とすが、息を吹きかけてほこりを払い口に入れてしま
う。

○カラオケボックス「カラカラ」外観

○同・受付

立野と安藤が受付に。受付には桜井花子（19）が立っている。

花子「お名前と連絡先をお願いします」

安藤はうなづく。用紙に名前など書いている。

立野「この時間はいつも君？」

花子「そうですか」

安藤「アルバイト？」

花子「はい。2時間でいいですか」

立野「それでお願い」

安藤「よく会うね」

花子「ほぼ毎日入ってますから」

花子は笑顔をみせる。

○カラオケボックス内

立野と安藤は曲を流し、それに合わせてラップを口ずさんでいる。

○同・廊下

花子を通りかかる。ボックスを覗く。

熱唱している立野と安藤が見える。

○同・受付

清算する立野と安藤。

花子「歌の練習してるの？」

安藤「そうそう。俺らラッパーなんだ」

花子「自称ラッパー？」

安藤「失礼だな」

立野「まあ、今はね」

花子「この辺り、ラップやってる人、多いですね」

立野 「駅前にライブハウスがあるからね」

安藤 「興味あったら今度、俺らのボックスに

寄ってみてよ」

花子 「工作中だし」

安藤 「5分もかからないからさ」

花子 「じゃあ、今度」

立野 「よし、じゃあ明日も来るわ」

安藤は花子のネームタグを見る。

安藤 「花子ちゃんは学生？」

花子 「そうですよ」

安藤 「なんの勉強してるの」

花子 「いちおう芸大です。前衛芸術」

立野 「ぜんえい？何それ」

花子 「モダンアートの方がわかりやすいか

な」

安藤 「芸術家目指してるのは同じだね」

花子 「芸術家！まあ確かに」

他の客が入って来る。

立野 「じゃあ、また明日」

2人は出ていく。

○一戸建て外観（夜）

○同・居間

太郎がテーブルで飲んでいる。テーブルの上には大きな紙袋が置いてある。

立野が入って来る。

立野「また飲んでんの」

太郎「いいだろ、べつに」

立野「今日は勝ったんだ」

太郎「おう。お前も好きなの持ってたっていいぞ」

立野「じゃあ」

立野は紙袋を覗き、ポテチを持っていく。

立野「飲みすぎはよくないよ」

太郎「そんなことあわかってる」

立野「一日中飲んでんじゃん」

太郎「親に注意するな」

立野「注意されるような生活してるからだろ。

死なれたら困るんだよ」

太郎「死ぬほど飲んじゃいない」

立野「ほんとは働いてほしいんだけど」

太郎「俺は働きたくても無理なんだよ。こんな体だろ」

立野「どこか働き口はあるんじゃない」

太郎「ないね」

立野「よく探してもらったら？ちゃんと働いてもらいたいんだけど。世間体もあるし」

太郎「世間体？いつ世間体なんて小難しい言葉、覚えたんだ。働いたら生保、貰えなくなるだろ」

立野「・・・・・・」

太郎「夕食はこれな」

太郎はテーブルに置かれたコンビニ弁当を指す。立野はそれを取る。

立野「野菜炒めでも作るよ。キャベツが冷蔵庫にあっただしょ」

立野は台所に向かい、鍋で野菜をいためる。

太郎「塩とこしょうだけでいいから」

立野「わかった」

太郎「あまり炒めすぎないように」

立野「細かいな。いちおう料理人だよ」

立野は鍋からテーブル上の大きな皿に

野菜炒めを盛る。

太郎「うまそうだな。また飲みたくなってきた」

○同・立野の部屋

立野はヘッドフォンをつけ、体を揺ら

しポテチを食べながらノートに歌詞を

書いている。

○カラカラ外観（朝）

○同・カラオケボックス内

花子が座り、その前に立野と安藤が立っ

ている。

立野「1、2、3、4」

安藤はプレーヤーの電源を入れる。

音楽に合わせて2人はラップする。花

子は手拍子を打つ。

立野・安藤「俺ら川本生まれ、川本育ち。

ラッパーの卵、魂を揺らす。夢は頂点、

羨望の的。地元の餓鬼ども、2人にひれ

伏す。女ども、しつけえぞ。つきまとう

な。みんなで叫べ、川本の生ける伝説。

ラップゴット ラップゴット、ラップゴ

ット川本小僧。ラップゴット、ラップゴ

ッ、ラップゴッ、ラップゴット川本小

僧」

立野と安藤は首を前後に揺すって熱唱し

ている。

花子は笑いだす。

× × ×

立野「どう？」

花子「・・・・・・」

立野「リズムが悪いとか？」

花子「なんか笑えたわら。川本小僧って妖

怪？。都市伝説？」

立野「妖怪ってなんだよ」

花子「不気味」

安藤「そう感じさせるのが狙いな」

花子「ふうん」

安藤「共感した？」

花子「共感？するわけないでしょ」

立野「男向けの歌詞だしね」

安藤「リズムはどう？」

花子「そのままでもいいと思う」

立野「もう少し、書き直すよ」

花子「ラップバトルって明日？」

立野「うん」

花子「面白そうだから見に行こうかな。駅前

でしょ。私の展示会も見に来てくれな

い？」

安藤「展示会やってんの」

花子「うん。駅の近くで」

立野「じゃあこれから3人で行こうよ。安藤

も暇だろ」

○展示会場

立て看板が立っている建物入口。3人が歩いてくる。

○展示会場内

3人は壁に掛けられた絵とか、工芸品を見て回る。

立野はあるカラフルでポップな絵の前で立ち止まる。

立野「これ良くない？」

安藤「いかにも、ぜんえいって感じ」

立野「花子ちゃんの作品？」

花子「隣のがそう」

その隣には工芸品が壁に掛けられている。緑色の1と0が正方形の中に表示されており、ランダムに1と0が切り替わっている。1の表示より、0と表示されるマスがはるかに多い。

立野「かっけえ。マトリックスって感じ」

安藤「いいじゃん、モダンで」

花子「ありがとう」

安藤「これ、何かのメッセージ？」

花子「現代社会の象徴なの。この1と0は人間で、1が勝ち、0が負け。中間はないということ」

安藤「なるほど」

立野「色をもっと増やせばよかったじゃん」

花子「シンプルなほうがよくない？」

しばらく花子の工芸品を眺める3人。
1から0に切り替わるマスもあればずつと0のままのマスもある。

立野「切り替わりが激しいな」

花子「変化が激しい時代だから」

花子は自分の顔を入れて、スマホで工芸品を自撮りする。

立野「ん？」

花子「インスタに上げるの」

立野と安藤は花子のインスタを覗き込む。すでにいいねが何個もついでいて

コメントも。「あいかわらずきれいだね」とか「さすが芸術家」とか「どこでやってるの。花子と会いたい」など。

立野「人気あるな」

花子はうなづく。

立野「飯行く？」

安藤「腹減った」

立野「ラーメン屋でいいかな。花ちゃんは」

花子「いいよ、ラーメンで」

立野「駅前にうまい店あるんだ」

○街の通り

並んで歩く3人。道端の木に桜が咲いている。

立野「ああいうの作ってるとは意外だったわ。

もっとポップなの想像してた」

安藤「俺も。かわいい系かと」

花子「もう春だね」

立野「そういえば、桜が咲いてるの初めて気づいた」

花子「とつくに咲いてるよ」

安藤「俺ら夜行性だから。昼間は寝てるから」

花子「ラップを始めたきっかけ、聞いてい

い？」

立野「竜神のDJが高校の先輩でさ」

花子「竜神？」

安藤「知らないの。ヒップホップグループ。

テレビにも出てるし」

立野「DJ わたべ。たまに地元にも帰っ

てくる。ラップバトルも見に来るかも」

○（回想） 高校外観

川本工業高校と校門に表示されている。

○同・校舎

壁に落書きがいっぱいされており、床にはごみが散乱している。

○同・校内

派手な格好のDJわたべがボディコン

の女の子を連れて歩いている。いかついボディーガードが付き従い、その周りに生徒たちが群がって騒いでいる。その中に立野と安藤もいて、飛びあがって、わたべの姿を一目見ようとしている。

○同・教室内

がらんとした教室。

黒板には「今日は自習です」と書かれている。(「は」にバツ印が書かれている)

「も」と上に書かれている)

立野と安藤が興奮した様子で立っている。

立野「DJわたべ、見た？」

安藤「ああ、かっけえなあ」

立野「番長がスターになるとは」

安藤「最高だね」

立野「うちらもラッパー目指さないか」

安藤「ラッパーか。男の憧れ」

立野「お前、リズムメーカー持ってるって言うってたろ」

安藤「うん。リズムは俺が作る」

立野「じゃあ俺が詩を書く。グループ名は？」

安藤「のりおとたかしから、組み合わせてのりたてはどうだろ？」

立野「漫才コンビみたいじゃん」

安藤「だめか」

立野「川本小僧ってどうかな」

安藤「川本小僧。そうだな、それでいく？」

立野「うちら川本小僧。よろしく」

安藤「今日はたぶん、運命の日だ」

立野「これからサイゼ行かない？ゆっくり計画を練ろうよ」

○ラーメン屋・店内

カウンターに並んで座り、無言でラーメンを食べる3人。

花子「立野君、さっきから何考えてるの」

立野「えっ？今もラップを続けてる理由」

花子「ふーん。どうして続けてるの」

立野「自分の内側にあるどろどろしたもの

外に形にして現したいっていう欲求か

な。それで自分自身も一回り大きくな

れそうだし」

安藤「かっこつけてんじゃねええ」

安藤がいきなり叫ぶ。

立野「いや、ただの承認欲求かも。みんなか

らいいね、って言われたい」

花子「わかる」

安藤「俺にも理由を聞いて」

立野「お前は女にもてたいとかそういう単純

な理由だろ」

安藤「大金をゲットしたいってのもある」

立野「まあ、今よりはいい暮らしができるの

は確かだろうけど」

安藤「いい暮らししたいねえ。貧乏から抜け

出したい」

立野「俺もそれはある。ところで花ちゃん

って地元はここ？」

花子「都内だよ」

安藤「一人暮らし？」

花子「両親と一緒に」

立野「で、都内の美大に行ってるの」

花子「そう」

安藤「お嬢さんじゃん」

花子「別に。普通でしょ」

立野「いや、俺らと比べたらさ」

花子「ラッパーって反社の人とか多くない？」

立野「知り合いに何人か」

安藤「ワルってイメージ？」

花子「うん」

立野「ほとんど底辺の人間ばかりだからさ。

ラップで申し上がるうって奴が、犯罪で捕

まる覚悟で、いちかばちか大金をせしめよ

うって考えてもおかしくないだろ」

花子「闇が深いんだね」

立野「花ちゃんの周りとはかなり違うだろ

うね。こいつなんて」

花子「え？」

安藤「おい！」

立野「いや、なんでもない」

花子「ラップバトルって何時から？」

立野「7時に来てくれれば」

花子「わかった。友達と行く」

○街の裏通り（夜）

ネオンがあちこちで輝いている。

○スネイク入口（夜）

花子が女友達と入って行く。

女友達「なんかやばそうじゃない？」

花子「友達が出てるの」

花子は友達の手を引っ張る。

○同・ホール内

多くの若者達で込み合っている。

ステージを見る花子。

MC「次は地元出身、ノライヌ バース
川本小僧」

右側から黒づくめの服装の、坊主頭のいかつい男達3人が出てくる。

左側からは立野と安藤。

司会者はコインを投げて手のひらの上に載せる。

立野とノライヌのリーダー川中 龍

(28) が両脇に立つ。

MC「表裏どっち」

川中「表」

MCは手のひらをどける。

MC「先攻は川本小僧、音楽スタート」

立野と安藤はラップを始める。

観客は普通に聞いていて、2人は笑顔を浮かべる。

MC「サンキュー」

司会者は2人に拍手する。

立野と安藤は頭を下げる。ハイタッチする立野と安藤。

MC「みんなお待たせ。次はノ・ライ・ヌだあ」

川中「フリースタイル行くぜ」

音楽が始まる。

ノライヌの3人はラップを始める。

川中「よええ男はだせえからやめとけ。へな
ちよこどもにラップは合わねえ。とつとと
家に帰ってかあちゃんのおっぱいしゃぶ
ってる。D T、D T、D Tは消えろ」

観客は沸いている。

ノライヌのラップに合わせて体を揺ら
し、一緒にD T、D Tと叫んでいる。

立野はこぶしを握っている。

川中「おめえはニート、親は生保。おめえは
ニート、親は生保。おめえはニート、親
は生保……」

川中は立野を指さしながらなりたて
る。

立野「俺は童貞じゃねえ。ふざけやがって」

安藤「おい、挑発にのるな」

川中「おまえのとーちゃん、ごみ、くず、ご
み、くず……」

かつとしてノライヌのメンバーの一人、
渋谷茂（22）に飛び掛かる立野。
ノライヌの3人と川本小僧の2人は殴
り合いの喧嘩になる。
裏からボディーガード達が出てきて彼
らを引き離す。

○居酒屋外観（夜）

○同・居酒屋内

立野が頭を押さえながら焼き鳥を焼い
ている。

カウンターに男性客が一人、座ってい
る。

武田が腕組して突っ立っている。

立野「いてて」

立野は包帯が巻かれた腕を押さえる。

武田「大丈夫か？」

立野「なんとか」

武田「昨晚は散々だったようだな」

立野「出禁3か月くらいしました」

武田「そっか」

立野「武田さんも喧嘩とかありました？」

武田「一度あったよ。鼻を折られた。鉄パイ
プで」

×

×

×

がらんとした店内。

カウンターの奥で立野が背中を向けて
ラップを口ずさんでいる。

コンビニの袋をいくつか抱えて武田が
来る。立野の後ろで聞いている武田。

武田「悪くはないと思う」

立野が振り返る。

立野「聞いてたんですか」

武田「ノリは好きだけどな。なんかかっこつ
けてる感じがする。自分をさらけだして
ないっていうか」

立野「・・・・・・」

武田「ありのままの自分を出せば共感される
と思う。恥かしい部分もあるだろ」

立野「恥かしい部分」

武田「そんな気がする」

立野「難しいな」

武田「あいみよんみたいな」

立野「今度聞いてみます」

男性客が一人入って来る。

武田「しのさん、おひさしぶり」

男性客「いつものやつちようだい」

武田「はい」

立野は角ハイボールを作って出す。

武田「どうぞ」

男性客「あいみよんがどうかしたの」

武田「しのさん、知ってたんだ」

立野「お客さん、武田さんの知り合い？」

武田「バイト時代からの常連さん」

男性客「武田君もラッパ―目指して頑張って

たからね。彼のラップバトル見に行ったこ

とあるよ。メタルバットって名乗ってたっ

け」

武田「その話はやめてくださいよ」

男性客「恥かしがるこたあないだろ」

武田「女房に出会うまではラップ一筋だったから」

立野「先輩は俺の目標です」

武田「よしてくれ。目標にできるほどの人間じゃない」

立野「いえ、でもこの道の大先輩ですし」

男性客「立野君にビール一杯おごろう」

立野「あ、俺アルコールが全然ダメなんでノンアルで」

男性客「へえ、そうなの。意外だね」

立野「おやじがアル中で、酒は飲まないと決めてるんで」

男性客「真面目だな」

武田が缶からグラスにノンアルビールを注ぎ、立野の前に置く。

立野は一気に飲む。

40代の店長が出てくる。

店長「立野君、ちょっといいかな」

立野「はい」

○バックヤード

店長が椅子に座っている。

店長「立野君もここに入って3年になるよ

ね」

立野「はい」

店長「武田君みたいに正社員になる気はない

かね」

立野「正社員」

店長「立野君は真面目で仕事もできるし、給

料も普通の会社の新入社員と同じくらいは

出すよ」

立野「普通と言いますと」

店長「17、8万。悪い話じゃないと思う。

よく考えてみて」

立野「わかりました。ありがとうございます

す」

店長「来週中には返事を聞かせて」

○居酒屋・外（夜中）

立野が出てくる。

電柱の影に渋谷が立っているのに気が付く。立野は顔を隠して歩いていく。

○カラオケボックス内

立野と安藤がラップしている。2人で息を合わせている。

録音したラップを聞く二人。

立野「いいわ、これ」

安藤「最高だな」

○デリヘル事務所（夜中）

安藤がプロミスの督促状を見ている。

来月中に100万一括で支払えと書いてある。

葛野が入って来る。

葛野「しけた顔してんな」

安藤「はい？」

葛野「女の子は何人いる？」

安藤「3人です」

葛野「みんな出か」

安藤「はい」

葛野「ところでさ、いい仕事見つけちゃったよ」

そう言っつて葛野は財布を取り出して中身を見せる。1万円の束。

安藤「すごっ。賭博？まさか強盗？」

葛野「なに。俺をなんだと思っつてんの」

安藤「いい仕事みつかつたんですか」

葛野「ここ、電話してみ。仕事紹介してくれよ」

葛野はスマホを見せる。安藤が真剣な目で見ている。

メモ帳を取り出して番号を書いている。

安藤「ありがとうございます。助かります」

葛野「よかつたな。いい仕事みつかつて」

安藤「葛野さんは？」

葛野「誰か人を紹介してくれつて頼まれたんでな。安藤君、適任だと思つて。俺は人材募集担当」

安藤「ほんと、ありがたいです」

葛野「じゃあ、がんばって」

葛野は安藤の肩を叩く。

○ A T M

安藤が複数のカードを差し込み、金を引き出している。肩に下げた黒いバッグに入れていく。後ろに何人か人が並んでいる。

警官が入って来る。安藤の肩を叩く。

警官「失礼ですが」

安藤「え？」

警官「ちよつと来てもらえますか？」

安藤「え？ど、どこへ」

警官がもう一人入って来る。

安藤はうろたえる。

○居酒屋「川本次郎」内（夜）

立野が料理を作っている。

スーツ姿の若い男2人が入って来る。

立野「いらっしやい。あれ、見た顔だな」

鈴木「鈴木だよ。立野。まだ地元にいたんだ」

連れの男「知り合いですか？」

鈴木「高校の同級生」

立野「カウンターでいい？」

鈴木「うん」

鈴木と連れの男は並んで座る。

立野「仕事帰り？」

鈴木「営業で得意先を回っててね。その帰り。まだ安藤と組んでんの」

立野「ああ」

鈴木「たいへんだね」

立野「いや、別にたいへんでも。飲み物は何します？」

連れの男「自分はビールで」

鈴木「じゃあ、俺も。立野にも一杯おごるよ」

立野「どうも。ノンアルもらうわ。こちらの方は後輩？」

鈴木「4月に入ってきた」

立野「会社入って何年？」

鈴木「5年になるな」

連れの男「鈴木さんには色々と世話になって
ます」

立野「偉くなったもんだ」

鈴木「まだ係長さ」

立野「スーツも似合ってるよ。ビジネスマン
って感じ」

鈴木「おだてんなよ。照れるだろ」

立野「俺なんて、高校の頃から何も変わらな
いから。スーツ着たことないし」

鈴木「ずっとラップ続けているのも偉いと思
うよ。渡部先輩の影響で始めた奴はいつぱい
るけどみんな辞めてるもんな」

立野「あきらめが悪いだけさ」

鈴木「だけど、スネイクのバトル出てるんだ
ろう。噂は聞いたぜ。優勝したら音楽雑誌
に載るって」

○川本警察署外観（夜）

○同・留置所

ガラス越しに立野と安藤が向き合っている。
いる。

安藤「俺、懲役くろうかも」

立野「・・・・・・・・」

安藤「ごめんな」

立野「金に困ってるんなら言ってくれたらよ
かったのに」

安藤「100万だぜ。おまえに言っても」

立野「川本小僧の未来が消えたよ」

安藤「ほんとごめん。うかつだった」

立野「・・・・・・・・」

安藤「立野一人で頑張って。俺はムリだ。才
能がない」

立野「俺だってそんなのない」

安藤「いや、まだ行けるだろ。大丈夫だ。俺
には構わずに続けてくれ」

立野「曲は誰が作るんだ」

安藤「あんなの誰にだって作れるよ。リズム
マシンの使い方教えてやる」

○川本警察署玄関（夜）

花子が立っている。立野が出てくる。

花子「安藤君、どうだった」

立野「げっそりしてた。懲役くらうかもしれ
ないって」

花子「そう」

立野「ラップ辞めようかな」

花子「え？」

立野「きれいさっぱりあきらめて就職しよう
かな」

花子「・・・・・・・・」

立野「花ちゃんはどう思う？」

花子「中途半端に辞めちゃうと、後で後悔し
ない？まだいけそうな気がする」

立野「そうかな」

歩道脇の桜並木。花は散っている。

2人は薄汚い軽自動車の脇に来る。

立野「まだ時間ある？」

花子「30分くらいなら」

立野「いいところがあるんだ。花子ちゃんにも見せようと思って」

× × ×

車で夜の街を走る立野。窓を全開にしている。

花子「風が気持ちいいね」

立野はうなづく。

○海辺の駐車場（夜）

車が止まっており、立野と花子が堤防によりかかって海を見ている。

浜辺にはバーベキューをやる若者のグループが何組かいる。

花子「こんなところ初めて来た」

立野「コーヒーでも飲む？」

花子はうなづく。

立野は近くの自動販売機でコーヒーを2本買い、1本を花子に渡す。

花子「ありがとう」

立野「安藤が無事に出てきたら、ここで花火でもやろうよ」

花子「じつはね」

立野「ん？」

花子「来月からフランスに留学に行くことになつて」

立野「留学？いつまで？」

花子「2年の予定」

立野「2年もか」

花子「あと、彼氏ができた」

立野「え」

花子「彼氏」

立野「そっか。友達として、うまくいくよう応援する」

花子「ラップ頑張つて。うまく言えないけどいけそうな空気があると思う」

立野「空気？」

花子「うん」

立野「安藤にも言われた」

花子「まだまだいけるって」

立野「次回で最後にしようと思ってるんだ。

いかげん、まともに働かないと」

○川本次郎・外観（夜）

○同・中

立野と武田が料理を作っている。

武田「来週の週末はどうする？」

立野「相方がいないんですが」

武田「一人でもいけるだろ」

立野「俺、今回で最後にします。正社員の誘いもあるし」

武田「わかった。名前は どうする？」

○立野の家・居間（夜）

太郎が新聞を読んでいる。

立野が料理を作っている。

立野「俺、就職することにしたよ」

太郎「ラップは？」

立野「次のラップバトルで最後にする。おや
じにも見に来てほしいな」

太郎「駅前だろ。最後に見に行ってみるか」

○立野の部屋

リズムマシーンが置いてある。マニユ
アルを読みつつ、立野は首を傾げてい
る。

スマホを取る。

花子の声「もしもし」

立野「花子ちゃんって機械に強い？」

花子の声「なんの話？」

立野「俺、メカ音痴でさ。手伝ってもらいた
いことがある」

× × ×

花子がリズムマシーンをいじっている。

花子「使い方わかった」

立野「よかった。助かるよ」

花子「どういうパターンにする？」

立野「そうだな。彼氏ってどんな奴なの」

花子「同じクラスの人。告白されたの」

立野「ふうん」

花子「どうかした？」

立野「いや、なんでもない」

○成田空港外観

○同・出発ロビー

立野と花子が立っている。花子の両親
や友達もいる。

立野「俺、海外に行ったことないけど、金貯
めて遊びに行くよ」

花子「うん。ぜひ」

立野「コートダデルだっけ」

花子「(フランス語っぽく) コートダジュー
ル」

立野「海で泳ごうよ」

花子「案内する」

立野「じゃあ」

花子「じゃあね。ラップ頑張って」

花子は恋人らしき男と話し抱き合っている。立野はその様子を見ている。花子は一堂に手を振る。見送りの人々も手を振っている。

○同・建物屋上

真っ青な空に飛び立つ飛行機。立野が空を見上げている。

○カラオケボックス（夜中）

ラップの練習をする立野。

電話が鳴る。

電話の声「時間ですが」

立野「延長します」

○川本次郎・店内（夜）

カウンターにスーツ姿の二宮が一人座っている。

武田が料理を作っている。

壁には、スネイクのラップバトル開催

のポスターが貼ってある。

二宮の電話が鳴る。

二宮「え？まだ曲できてないの。困るなあ」

武田が聞き耳を立てる。

二宮「今月中には。絶対だぞ」

電話が切れる。

武田「二宮さん？」

二宮「なに」

武田「お仕事は何を？」

二宮「音楽事務所」

武田「プロデューサー？」

二宮「そうだよ」

武田「あっ、あの、すぐ近くでラップのイベントやってるんで見に行きませんか」

二宮「誰が出てるの？」

武田「ノライヌとか。あとここで働いてる

立野君も。見たことあると思うけど」

二宮「ああノライヌか。そうだな。ひまだし行ってみるか」

武田「ぜひぜひ。案内しますよ」

武田が厨房から出てくる。

○スネイク・ステージ脇（夜）

立野が立っている。ノライヌの川中が隣に立っている。

川中「懲りねえな。相棒は？」

立野「捕まった」

川中「ふーん。痴漢でもしたか」

立野「そんなんじゃねえよ」

川中「ま、お手並み拝見といくつか」

× × ×

司会「次はおなじみ、川本小僧。音楽スタート」

音楽開始と同時にステージに飛び出していく立野。

観客1「あれ、一人じゃん？」

観客2「相棒は？」

立野「一人になっても川本小僧は川本小僧だ！」

○スネイク・内

立野がラップを熱唱しつつ、腕を前に突き出して上下に振っている。

入り口ドアの近くに太郎がいて、頭上で杖を振っている。

隣の若い男が怪訝そうに見る。

若い男「あぶねーぞ、おっさん」

太郎は彼に話しかける。

太郎「あいつ、俺の息子」

若い男「川本小僧の？」

太郎「ああ」

若い男「へえ。おっさんがねえ」

近くに立っているギャルっぽい若い女

2人組も太郎を見る。

若い女「立野君のお父さん？」

太郎「ねえちゃん達、この後、飲みに行かない？おごるよ」

若い女「ええっ」

もう一人は笑っている。

立野がステージ上に。

立野「最後の曲です。みんな今までありがとう」

立野は歌いだす。

立野「俺の周りのみんなに感謝。先輩に感謝。産んでくれたおふくろに感謝。飲みすぎなきやいいとーちゃん。育ててくれたおやじに感謝。俺の相棒、たかしに感謝。俺らのラップ、聞いてくれたみんなに感謝。ありがとう、おれの人生。つきあってくれた仲間、支えてくれたみんなに感謝」

腕の動きに合わせて首を振っている観客達。

二宮も首を振りつつ、周りの観客の様子を見たりしている。

観客1「おっさん、音楽関係者？」

二宮「そうだよ」

観客1「そうなんだ。ここの客、20代ばかりだからさ」

二宮「彼、有名なの？」

観客1「立野君」

二宮「いいね、彼」

○ホール外

立野が歩いてくる。

二宮がタバコをふかしながら立っている。

二宮「こんばんは。立野君だね」

立野「そうですけど何か」

二宮「ちよつと話がある。川本次郎でゆつくり話そう。腹減ってるだろ。俺、こういう者」

二宮は名刺を見せる。

名刺には「二宮音楽事務所」と書いてある。

立野「えっ？音楽事務所」

二宮「こういう話は初めてかな」

立野「はあ。えっ、ほんとですか。いや、嬉しいです」